

## 編者まえがき

2007年は、「日印文化協定締結50周年」の年で、両国はこの年を「日印友好年」と設定し、様々な記念行事が計画・実施された。

前年の2006年4月、アジア文化研究所においても、何か記念すべき企画事業を実施できるかどうか検討することになり、計画実施のための企画推進委員会が同研究所内に発足した。企画推進委員会では、まず、以下のような大枠が決められた。

- ① アジア文化研究所は、国際シンポジウムや公開講座を企画・実施する。
- ② 三鷹市民の参加を得て、協働で実施できるような企画を検討する。

上記①のシンポジウムについては、何回かの企画推進会議の議を経て、「日印文化交流の今日的意味：グローバル化の中の真の豊かさとは」というテーマとなり、第1部「タゴールとガンディーの思想」、第2部「真の豊かさとは何か」の二部構成とした。また、私は2006年10月から2007年3月まで、インドのヴィッショバラティ大学（日本では通称、タゴール国際大学<sup>註</sup>）に客員教授として半年間滞在し、「日本社会論」「日本文化論」を教えることが予定されていたため、滞在期間中、このテーマでシンポジウムを実施することが実際に可能であるかの吟味をすると同時に、適切な招待講演者の交渉役も兼ねることとなった。

公開講座については、テーマ1.「変動するアジアにおける日印関係を考える」4回シリーズ、テーマ2.「インドの多様性と統一性」7回シリーズの連続公開講演会を計画することとなった。

なお、上記のシンポジウムと公開講座の実施については、国際交流基金からの助成を得ることができた。また国際基督教大学「21世紀COEプログラム『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開」もシンポジウム実施に際して、共催事業とすることが出来た。さらにインド大使館、三鷹市等の後援のもとに実施することが可能となったことも極めて幸いであった。全体の統一テーマを「インドが三鷹にやってくる」という設定のもとに、企画を推進することになった。

上記②については当初、三鷹市との協働事業の可能性が検討されたが、結果としてはそれぞれ、個別に企画を推進することとなった。同市の財団法人三鷹国際交流協会（MISHOP：Mitaka International Society for Hospitalityの略）では、インドに関連する3回の公開講演会が国際理解講座の一環として実施された。またインド・スタディツアー、三鷹市の小学校とタゴール国際大学付属小学校の子供たちの絵の交換展示事業、インドを食べよう、といった数々のイベントも実施された。

もちろん、MISHOPについてもアジア文化研究所にとっても、多くの三鷹市民の方々に参加していただくことは重要であり、その意味では両組織は広報協力を行ったといえることができよう。

さて、今日グローバル化する世界情勢を展望すると、「経済のグローバル化」が突出し、ますます市場の論理が優先し、企業間の競争が国家を超えて拡大・激化している。こうした背景のもとで、企業は競争原理に打ち勝つために、さまざまな合理化を進めざるを得ない状況になってきている。たとえば、業務の外部委託、安価な外国人労働者の雇用、各種の省力化技術の導入、安い労働力を求めて工場を海外移転する政策の推進、等々といった状況である。市場経済の進展は、確かに有効な企業運営を実施し、競争に打ち勝つことができた企業にとって急速な資本蓄積を可能にした。しかし、このような傾向の推移の中で、国内的に

も、国際的にも貧富の格差は、ますます増大の一途をたどっている。また、人々の飽くなき欲望の追求は地球環境問題を引き起こしていることもすでに広く認識されているところである。

私たちの生活は、果たして、「真に豊かになった」と言えるのであろうか。進展するグローバル化は今後、どのような方向をたどるのであろうか。人々は欲望を抑制し、置き去りにしてきた精神的豊かさを再度見直すことはないのであろうか。ガンディーやタゴールは、このような問題を20世紀初頭より、近代社会の重要な問題として提起し、真の豊かさの意味を問い続けていた。このような問題意識の下、今回の国際シンポジウムは「日印文化交流の今日的意味：グローバル化の中の真の豊かさとは」というテーマを設定し、第1部「タゴールとガンディーの思想」、第2部「真の豊かさとは何か」との二部構成とすることとなった訳である。

もっとも、インドは1991年の経済の自由化政策開始以来、年平均6%を超える急速な発展を遂げており、かつてガンディーの提示した物質主義に対する疑問や精神の豊かさの重視についての認識はかなり後退しているのも事実である。その意味において、今日のインドでは、ガンディー批判者が多数派であることは間違いないであろう。

しかし、少数派であるとしても、ガンディー主義者はその一方で、大いなる活力を持っていることも確かである。今でもさまざまなガンディー主義に基づく運動が展開され、存続し続けている。今回、ガンディー主義の活動家としてインド・ヒマラヤ地域における「チプロ運動」と「ダム反対運動」を指導してこられたバフグナー夫妻（スングルラール・バフグナー氏とヴィムラー・バフグナー氏）をお招きし、シンポジウムを実施することができたことは、極めて有意義なことであった。またタゴール国際大学でタゴールの研究に従事されるとともに教育にたずさわってこられた古田彦太郎氏を招待することが出来たことも幸いであった。シンポジウム当日には、北は青森、南は沖縄から、190名もの参加者が集い、大盛況であった。袈裟をまとった僧侶の方がシンポジウムに参加されたのも、ICUの歴史において特筆すべき出来事だったと言えよう。なお、バフグナー夫妻は日印文化交流年にあたり、日本の“一般の民衆”とひとりでも多く心の触れ合いをしたいという強い意欲をもち東京だけでなく熊本、愛媛、長野などにも精力的に足を伸ばし、各地の地元の人々と交流された。

公開講座の実施に際しては、駐日インド大使ヘーマント・クリシャン・シン氏に講演をいただくとともに、元駐印日本大使で、外務省参与（2007年インドにおける日本年担当）野田英二郎氏からも講演をいただくことが可能となった。以上のように、かなり幅広い企画を運営・実施することができたのは、ひとえにアジア文化研究所の所長をはじめとする、スタッフ、研究員が一丸となって協力したことによる。とりわけ、企画推進委員会では宇野彩子研究員が中心となりプロジェクトの実施・統括が行われた。石坂晋哉準研究員は、バフグナー夫妻を招くことを企画立案した。さらに、ICUで長年インド思想史を研究してこられた葛西實名誉教授が同企画推進委員会のメンバーとしてこの企画に参加され、さまざまな視点から意見を寄せられたことは、極めて幸いであった。

なお、実施に伴う煩雑な事務作業について、同研究所内の助手、秘書の方々にもさまざまな役割を担っていただき極めてスムーズに実施することができた。この場をかりて深くお礼を申し上げる次第である。

注) 西ベンガル州シャンティニケタンのヴィシュヴァ・バーラティー (Visva-Bharati) 大学 (日本では

通称、タゴール国際大学)はコルカタから急行列車で約2時間半の大学町にあり、のどかでゆったりした佇まいの大学である。この大学は1905年タゴール(アジアではじめてノーベル文学賞受賞)により私塾として設立されたが、その後、ガンディーの努力により国立大学として引き継がれ、現在に至っている。今日においてもインドが最も誇りとする詩聖タゴールの存在は大きな影響力を保持しており、他の国立大学とはかなり異なった性格を有している。たとえば、タゴールの父の誕生日に当たる水曜日が毎週の休日、火曜日半日。Visva-Bharatiとは大学を含む幼稚園からの教育機関全体を指す。教育の基本的理念は芸術を基礎とした創造性教育であり、国際交流の拠点大学を指向している。

2008年3月20日

新津 晃一